

地域球団ボランティアに携わる意味に関するライフストーリー研究

1180417 荻田 英樹

高知工科大学マネジメント学部

1. 本研究の背景・目的

近年、地域を盛り上げようと地方のスポーツクラブが多く立ちあげられている。しかし、中には財政状況が厳しいクラブが多々ある。その現状を([1]石原 2011)に基づき紹介する。2009年に発足した独立プロ野球リーグが翌年にNP0法人化の方針を発表した。しかし、シーズンの途中でリーグ運営会社が各球団に分配金を支払うことなく撤退し、以後、各球団が出資した新会社による事実上の自主運営という形で何とかシーズンを乗り切るなど、不安定な経営を露呈した。

今、現在も選手に対しての給料は低く、選手は個々でアルバイトなどにより生活費を稼ぐ現状は変わっていない。そこで、各球団は新規のファンを獲得するために様々なイベントを考え、実施しなければならない。

([1]石原 2011)によれば、アメリカのマイナーリーグのある球団では年1回の花火大会ではスタンドを市民に開放し、このイベントを通じて、野球に興味のなかった市民を新たな顧客として呼び込もうとしたり、外野の上層スタンドにパーティースペースを用意し、試合のない日や時間帯も会議場などとして貸し出したり、様々な形で市民に利用させ公共性を保ち、球団は野球興行以外での収入を確保している。

しかし、独立プロ野球リーグは資金、人手ともに足りず、県の支持なく、設備を勝手に整えることも許されず、自分達だけで大規模なイベントを行い、新規のファンを獲得するのはなかなか難しいのが現状である。そこで必要となってくるのが地域からの支援を促すことである。

([2]松橋・金子 2007)、([3]松橋・斎藤・岩月・玉村 2012)によれば、地域からの支援を促す活動の1つに運営ボランティアを得るための活動がある。

独立プロ野球リーグは球団スタッフが少ないため、イベントを行う際にはボランティアの存在が必要不可欠である。ところが、ボランティアがなかなか集まらないのが現状である。その理由の1つとしては、ファンは座って観戦できるがボランティアは試合前の準備、販売、チケットのもぎり、試合後の後片付けなど試合をあまり見ることができず、お金も

貰わずにハードな力仕事もしなければならない。

私はこのような力仕事をお金ももらわずにするなら、ファンとして観戦したほうがいいと感じた。また、ボランティアをしている人はただスポーツが好きだから、このチームが好きだからという理由だけでボランティアをしているのだろうか疑問を感じた。

そこで本研究は独立プロ野球リーグの四国アイランドリーグplusに所属する高知ファイティングドッグスのボランティアの方を対象になぜこのボランティアをやっているのか、何がきっかけで始めたかについてインタビューを行う。そして、人生史の視点からインタビューに関わることの意味を見出すことが本研究の目的である。

2. 研究方法

2.1 現地調査

実際に独立プロ野球リーグの高知ファイティングドッグスのボランティアに参加をし、聞き取り調査に協力をしてくれる人物を調査した。行ってきたボランティアとしては以下の3つである。

1. 高知ファイティングドッグスの試合運営のボランティア
(2016年6月～2017年9月の間に約20回)
2. 社長、球団スタッフ、一部選手との忘年会への参加(2016年12月)
3. 龍馬マラソン(2017年2月)、よさこい祭り(2017年8月)などイベント出店のボランティア

そしてこれらの活動の中で特に熱心にボランティアをされていると感じたK氏にインタビューの協力を要請し、インタビューを行った。

2.2 調査対象者の概要

本研究でインタビュー調査(電話調査)となった者の概要を

述べる。

K氏は36歳の女性でボランティア歴1年である。現在は県庁の契約社員として働いている。

1回目の調査(2017/11/14):K氏(約90分)

2回目の調査(2017/12/19):K氏(約60分)

3回目の調査(2018/1/27):K氏(電話約10分)

インタビューの音声はすべて録音し、書き起こしを行った。書き起こしのページ数はA4用紙54ページである。

2.3 分析方法

本研究の分析には([4]マンデルbaum 1973)が開発したライフヒストリーの分析手法を用いる。([5]ラングネス・フランク 1993)が解説している通り、マンデルbaumはライフヒストリーを分析するにあたって、ある人の人生の諸次元、主要なターニング、その人の適応の特徴的な手法が考慮されるべきであると主張している。彼によって実際に言及されている次元は次の4つがある。人の肉体的な成長やそれによって得られた能力を指す生物学的次元、人の感情・態度・内面的な考え方を指す心理的次元、人が自分の住む社会の中でどのように人生を送るのが一般的だったかということを指す文化的次元、人が住む社会の中にどのような規範・ルールがあったかということを指す社会的次元である。

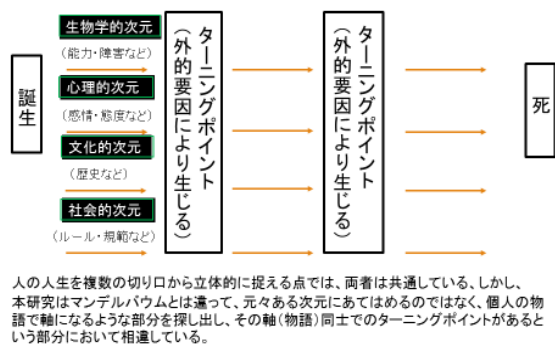


図1：マンデルbaumが開発したライフヒストリーの分析手法

本研究は人の人生を複数の切り口から立体的に捉える点では共通しているが、マンデルbaumの研究とは違い、元々ある次元にあてはめるのではなく、個人の物語で軸になるような部分を探し出し、その軸同士でのターニングポイントがあるという部分において相違していることを図で示し、新しい

手法を構築すると同時に、人生における高知ファイティングドッグスでのボランティアを行っている意味について分析する。

3. データ収集結果

3.1 略歴

K氏の略歴を記載する。

20歳～22歳 (大学在学中)	児童養護施設の ボランティア
22歳～27歳	高校の臨時教員
27歳～30歳	臨時公務員
30歳～32歳	生活保護のケースワーカー
32歳～34歳	別の仕事(職種不明)
34歳～36歳	観光コンベンション センター

高知ファイティングドッグスのボランティアを始めたのは35歳の時であり、現在は有給休暇を使ってまでボランティアに参加する熱心な方である。

3.2 ストレスを生かす(物語①)

小・中学生の時、いじめられていたK氏は自身がいじめられていることを親に言うことが出来ず、心の中でストレスを抱えていた。しかし、親の前では無理して明るく振舞っていた。それは今から振り返れば、いじめをテーマとしたテレビドラマの主人公を自分が演じているかのようなだった。

時が経ち、大学生になった時に児童養護施設でのボランティアを経験した。その時のK氏が今でも心に残っているエピソードを1つ紹介する。

その養護施設では、月に1回親御さんが来る一斉面会日が

あり、子供たちは親御さんとの楽しい一時を過ごす。そんな中、1度も親御さんが来たことのない4歳の男の子A君がいた。その子は親御さんが来ることがないが、寂しがる素振りを先生に見せることは決してなかった。

とある面会日、他の子供たちが親御さんと交流する中、A君はK氏と遊んでいた。親御さんたちが帰る時間に多くの子が泣いている中、普段は先生に対しては明るい表情しか見せないA君が、K氏の前で号泣していた。多くの子供たちが号泣している状況の中で、自身の泣き声が、かき消されることをA君は知っているかのようにだった。

K氏：ずっと我慢していたんじゃないかな？と思います。ずっとこう…入口のほうを見て…、(私は)事情を知らないですけど、先生と本人はたぶん100%来んっていうのをどっかで分かってて…、でもずっと(親を)待ってるんですよ…。もしかしらって思っ…なのでそれがもうなんか…溢れ出たんじゃないかな〜と…思いますね。

いじめを受けていた時に親に言えなかった自分と親が来ないのが分かっていて、悲しいけど先生たちの前では、明るく振舞っている男の子が合致して、無理して生活しているだろう男の子に別の顔を見せてほしいと強く思った。この経験は「子供のストレス」について考える1つのきっかけになった。

ボランティアをしていたある日、ファイティングドッグスが試合に負けた。応援してくれていたファンに対して、明るく振舞わなければならない選手たちが、帰宅時にボランティアやファンに対して、挨拶もせず素通りしていく姿を見て、思わず注意した。そのような素振りを敏感に察知してしまうファンもいるから、弱みは自分だけに見せてほしいということを伝えたかった。

聞き手：そのファイティングドッグスの選手の人たちというのはやはりストレスを抱えてるんでしょうかね？

K氏：あ〜抱えてると思います。たぶん抱えてない選手はいないと思います。

いじめられた実体験を経て獲得した、ストレスを抱えた子

供の闇に関わりたいたいという思いが、先が見えないながらもNPBに入るという夢を追いかけ続ける選手との関わり方に通じている。

3.3 ストレスに対する強さの獲得(物語②)

小・中学生の時、いじめられていたこともあり、強い態度や言葉で当たられると委縮してしまうようになった。

高校の臨時教師時代には本来、担任をするはずだった正規の先生が病気になり、代わりが必要ということで臨時教師ながら1年間担任を任された。しかし、そのクラスはとても複雑で問題の多いクラスだった。そんなクラスを持ったK氏はクラス全員28人でどんなことがあってもみんなで助け合っ…て絶対に卒業すると心に決めて、クラス全体の目標にも掲げたこともあり、同僚の先生たちに生徒のためになるように意見を言っていたが、若く臨時ということもあり、舐められて強く当たられていた。

そして、現在の職場に移ってから、最初のころは有給休暇を使ってボランティアに行こうとすると、周りの同僚などの冷たい空気や視線を感じたり、同じ部署の上司には「有休を使ってまでいくことか？こんな忙しいのに。」と言われたり、委縮することが多々あった。

そんな時、申し訳なさそうに頭を下げながらボランティアに向かっているK氏の姿を見て、普段から隣の席ということもあり仲が良く、周りの社員からも慕われていた隣の部署の上司が一言言った。

「謝ることないやん。お金ももらわず、ボランティアをして…有給までもそのボランティアに使って…素晴らしいことしゅうやん。」

この上司は、県として高知ファイティングドッグスを支援する業務を担う部署におり、K氏の球場での頑張りを目にしたこともあったのだ。この言葉があったからこそ、現在では人の顔色を前よりは伺うことなく、割り切ることができ、以前より気持ち的には楽にボランティアに行くことが出来ている。

3.4 人間関係での成長(物語③)

小・中学生の時、いじめられて仲間外れにされ、誰も寄って来ることはなく、不登校になるときもあった。その結果、人間関係に苦手意識を持つようになり、それが大人になっても続くようになる。

そんなK氏が高知ファイティングドッグスのボランティアを始めたきっかけは、実家でショウガ農家をしている際に、農業に力をいれている高知ファイティングドッグスから、選手たちがシーズンオフ中にできるバイトを探しているという声があった。その地域としても高齢化が進んでおり、若い力が欲しいと思っていたことから、K氏は選手たちを雇った。K氏は選手たちと交流を深めながら、選手の元気に一生懸命手伝ってくれている姿を見て、恩返しをしたいと思っていたところ、球団の副社長に声をかけてもらい、ボランティアをするようになった。

ボランティアとして働き始め、忙しい時には、1日に100杯を超えるような量のビールをついでいた。そんな中でも、ビールをついでいたら、あるお客さんが「お姉さんの入れてくれるビールは美味しいわ〜。」と言ってくれたり、他にも自家製梅酒をプレゼントされたりするなど、色んな人と出会い交流を深めていった。

ある時、いつもビールを買いに来てくれる1人の物静かな中年の男性のファンがカバンを差し出し、サインを求め、寄ってきた。そのカバンにはボランティア仲間のサインが所狭しと書き込まれていた。K氏は戸惑いながらも書ける場所を探し、サインした。

K氏：なんか、その〜そうやってボランティアスタッフのこともそうやって思ってくれちゃう人もおるんやなと思って…。

ネガティブな面で注目されていたK氏が、ボランティアスタッフの一員として認められ、温かい人たちに囲まれた人間関係の中に自分が身を置けていると、ポジティブな面で注目されていると認識できた瞬間であった。

4. 統合的分析

3つの物語の出来事を図式化したグラフを記載する。

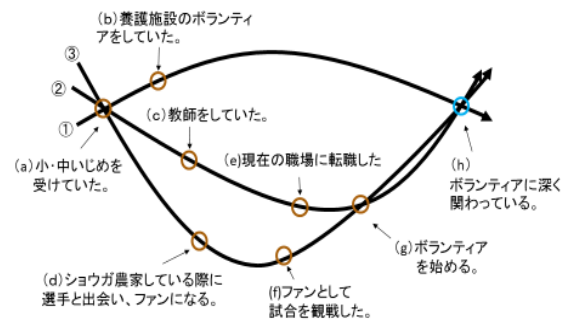


図2：物語①～③の要素となっている出来事を図式化したもの

本研究はボランティアを始め、深く関わっているKさんの人生を探究することを目的としていた。そして、その目的を果たすためにボランティアに関わっている事が一要素になっているような物語を探索した。その結果が物語①～③で表されており、その物語の要素となっている出来事を図式化したものが図2である。3つの物語が(h)で交わっている様子が表現されている。

人生の中の出来事の意味というものは、それ単独では決まらず、必ず比較するものがあることで初めて定まる。具体的には、その出来事を過去の出来事についてのどの系列の延長上に置くかで意味は決まる。

今回の事例では(h)「ボランティアに深く関わる」という出来事は、次の3つの延長上に置くことで、その意味を確定できる。

①対人的洞察力に関する次元

②敵対的な人間関係のマネジメント能力の次元

③親和的な人間関係の醸成能力に関する次元

この3つの各次元において、K氏のボランティアに深く関わる意味を分析すると、以下のように表すことができる。

①過去の対人関係上での苦い経験があり、ストレスを抱えていたからこそ、ボランティアをしていた中で見えてきた高知ファイティングドッグスの選手達のストレスにも敏感になり、対人的洞察力が向上した機会となった。

②今までは強くあたられるとストレスを抱え込んでしまい、委縮することがあったが、ボランティアに行くことを応援してくれる上司の言葉で考え方が変わり、ストレスに対す

る強さを獲得し、敵対的な人間関係のマネジメント能力が向上した機会となった。

- ③今までは人間関係を持つことに不安を感じ、拒絶することが当然ようになっていたが、ボランティアに深く関わることで温かい人間関係の中に、身を置くことができ、親和的な人間関係の醸成能力が向上した機会となった。

結論

すなわち K 氏がボランティアに深く関わっているという出来事とは、K 氏の人生にとっていじめというつらいコンプレックスを抱えていたが、それが成長の糧となり、3 つの次元でポジティブな意味に転換して、それぞれの次元で新しい能力に気づくきっかけという意味を持つものだった。

また同時に、人生における重要な出来事の意味を、あらかじめ用意した枠組みによって理解するのではなく、いわばオーダーメイドのように枠組みを構築することを通じて理解する、そのための手法を構築した。

参考文献

- [1] 石原豊一 (2011) , スポーツ産業学研究, Vol. 21, No. 1, 73 ~ 84. 日本におけるプロ野球マイナーリーグの持続的モデル構築に向けてー野球ビジネスの日米比較からー
- [2] 松橋崇史, 金子郁容 (2007), スポーツ産業学研究, Vol. 17, No. 2, 39~55. 原著論文スポーツ組織マネジメントにおける地域コミュニティ戦略ーJ クラブの事例研究ー
- [3] 松橋崇史, 斎藤和真, 岩月基洋, 玉村雅敏 (2015) , スポーツ産業学研究, Vol. 25, No. 2, 201 ~ 215. 公共スポーツ施設経営における地域コミュニティとの協働戦略ーA 社のケーススタディを通じた制度的条件と成果の検討ー
- [4] Mandelbaum, David G. (1973). ” The Study of Life History: Gandhi. ” Current Anthropology, 14(3) : 177 -206.
- [5] L. L. ラングネス, G. フランク. (1993). ライフヒストリー研究入門 伝記への人類学的アプローチ.